社会的スキルの欠如が抑うつに及ぼす影響

——女子中学生を対象とした場合——

今津芳恵¹ 早稲田大学

Social skill deficits and depression in junior high school girls

Yoshie Imazu (Waseda University)

The purpose of the present study was to clarify the effect that social skill deficits had on depression in junior high school girls. Social skills and symptoms of depression were measured in a survey of 775 junior high school girls. About six weeks later, symptoms of depression were measured again, along with occurrence of stressors during the interval. It was found that social skill deficits were significantly associated with depression. A hierarchical regression analysis indicated that after partialling out the influence of first depression scores, social skill scores contributed significantly to the prediction of post-interval depression scores. In addition, we found an interaction effect of social skill and stressor scores on post-interval depression, and girls with social skill deficits became more depressed when they experienced stressors.

Key words: junior high school students, depression, social skills, stressors.

The Japanese Journal of Psychology
2005, Vol. 76, No. 5, pp. 474-479

1980 年, アメリカ精神医学会の DSM-III (Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, 3rd ed.; American Psychiatric Association, 1980) が登場し, 小児のうつ病が成人と同様の診断基準で診断されるようになって以来, 欧米では小児の抑うつに多くの注目が注がれるようになった。近年, 日本でも抑うつ状態に陥っている小児が少なくないとの指摘がなされ始めている。全国的な規模での疫学調査が行われているわけではないが, 村田・皿田・堤・新保・中庭・小林 (1990) は, 一般の中学生に抑うつ自己報告質問紙を実施した結果から, うつ病の有病率を 5.9% と推測している。また, Sugawara, Mukai, Kitayama, Toda, Shima, Tomoda, Koizumi, Watanabe, & Ando (1999) は, 8 歳児の大うつ病の有病率を 2.7% であると報告している。

小児の抑うつを把握することはいくつかの点で重要であると考えられる。小児の抑うつは, 成人より高い割合で不安障害や行為障害など他の精神疾患と結びつく (Lewinsohn, Rohde, Seeley, & Hops, 1991)。さら

に, この時期の抑うつは, たとえ回復したとしてもその後成人期のうつ病に結びつく割合が高い (Harrington, Fudge, Rutter, Pickles, & Hill, 1990)。しかし, 抑うつの中心症状である抑うつ気分は, 主観的な経験であるために親や教師からは気づかれにくく単に神経質なお子様であると片づけられてしまったり, 非行などを伴うために単なる行動上の問題として扱われてしまったりする可能性も秘めている。もし, わが国でも抑うつ状態に陥っている小児が少なからずいるとしたら, その適切な把握と介入が急務であると言えるだろう。

抑うつの原因を考える場合, 思春期は最も重要な時期である。それも特に女子にとって特別な時期であるように思える。児童期と比較すると, 青年期初期に抑うつ気分やうつ病が増加し (Fleming & Offord, 1990), 特に女子が男子の 2 倍に至り成人期もそのまま推移するとの結果は, 欧米の疫学研究でほぼ一貫して実証されてきている (Nolen-Hoeksema & Girgus, 1994)。その原因として, 依存性, 身体像, ホルモン, 性的虐待, 性役割など, 心理, 生物, 社会的側面から, 数多くの説明がなされてきているが, どれも決定的なものとはなっていない。それでも抑うつの原因を考える場合, 青年期初期, そして特に女子にとって何らかの問題が関与している可能性は大きいことが推測

Correspondence concerning this article should be sent to: Yoshie Imazu, 6-419-16, Sakae-cho, Matsudo-shi, Chiba 271-0062, Japan (e-mail: imazu@ruri.waseda.jp)

¹ 本研究を行うにあたり終始ご指導と激励を賜りました故東清和早稲田大学名誉教授に心から感謝の意を表します。

されてきている。先述したように、わが国では全国的な疫学研究は行われていない上に、抑うつの原因に関する研究はほとんど行われていない。しかし、欧米においてさえなお、思春期の抑うつの原因に関する研究は十分とは言えない。この時期の女子を対象に抑うつ研究を行う意義はここにあると言える。

抑うつの人、他者との相互作用において何らかの問題をもつことは以前から指摘されてきている (Coyne, 1976; Hammen & Peters, 1978)。抑うつ状態にある小児もまた、仲間との相互作用において、仲間拒否感を抱かせることが示唆されている。例えば、抑うつとソシオメトリックテストで示される拒否児 (集団から排斥されている子ども) や無視児 (集団から選択されない子ども) といった社会的地位との間に関連がある (Blechman, McEnroe, & Carella, 1986)。また、小学3年生から6年生の小児は、抑うつの中間のフィルム描写に対して拒絶を示し、好ましくなく魅力的でないと評価する (Petersen, Mullins, Ridley-Johnson, 1985)。

このメカニズムを説明するために、抑うつの人には社会的スキルが不足しているとの仮定がなされ、成人においては、抑うつと社会的スキルの欠如の関連が多く見いだされている (Dykmen, Horowitz, Abramson, & Usher, 1991)。同様の結果は小児においても見られている。例えば Wierzbicki & McCabe (1988) は、8歳から14歳の小児と両親に社会的スキル尺度と活動性チェックリストを実施し、親報告と自己報告での社会的スキルの低さが抑うつと関連していることを見だしている。

このように、対人関係での問題と抑うつとの間には明確な関係が存在しているように思われる。ところが、これらの研究には因果関係を確認するような情報は少なく、その情報が混乱したものである。例えば Zemore & Lewis (1983) は、大学生を対象として、抑うつ尺度、抑うつになる傾向を評価する尺度、問題解決スキル尺度を実施した。その結果、抑うつになる傾向と問題解決スキルとの間に有意な相関を見だし、社会的スキルは抑うつと先行条件であると報告している。一方、Segrin & Abramson (1993) は、大学生を対象とした研究で、社会的スキルと抑うつとの関係に関して2回の調査を実施した結果、第1回調査時の社会的スキルと抑うつとの間には負の相関があったが、第1回調査時の社会的スキルの欠如は第2回調査時(4ヵ月後)の抑うつを予測しなかったと述べている。社会的スキルの欠如が抑うつの原因なのか、それとも抑うつに伴う症状として社会的スキルが欠如するのかを明らかにするためには、抑うつと社会的スキルの間に関する現在の関係と因果関係の両方を評価するための縦断的研究が必要である。

以上から本研究では、対象を女子中学生に限定して

抑うつの特徴を明らかにするために、社会的スキルの欠如がその後の抑うつに及ぼす影響を検討することを目的とする。その際、2回の質問紙調査を行うことにより、社会的スキルと抑うつとの因果関係を明らかにする。さらに、社会的スキルと抑うつとの間を媒介するストレスを考慮し、社会的スキルの不足がストレスとかわかって抑うつに影響を及ぼす過程を明らかにする。具体的には以下の三つの仮説を検証する。(a)社会的スキルの欠如は抑うつと相関する。(b)社会的スキルの欠如はその後の抑うつを予測する。(c)社会的スキルの欠如とストレスの交互作用がその後の抑うつを予測する。

方 法

調査対象

調査の対象は、X、Y、Z女子中学校の女子中学生、1年生から3年生の1039名であった。このうち、2度の調査を通して参加できなかった場合、また記入漏れや記入ミスがあった場合は分析から除外した。その結果、775名が分析対象となった(有効回答率75.0%)。なお、X女子中学校は東京都内の中高一貫の進学校、Y女子中学校とZ女子中学校は大学併設校である。

調査日時

第1回調査は1997年10月、第2回調査は6週間後の11月に実施した。

手続き

第1回調査、第2回調査ともに、質問紙による調査を行った。第1回調査においては、抑うつ尺度、社会的スキル尺度の2種類、第2回調査においては、抑うつ尺度、ストレス尺度の2種類を実施した。

2回の調査はともに、ホームルームの時間に学級ごとに集団実施した。無記名式としたが、第1回調査と第2回調査のデータを一致させるために、学年、クラス、出席番号の記入を求めた。

質問紙

抑うつ尺度 Zung (1965) による抑うつ症状の自己評定式尺度である Zung Self Depression Scale (SDS) を用いた。SDS は、抑うつスクリーニングや疫学調査に国内外で広く用いられている20の抑うつ症状からなる尺度である。各項目の症状の頻度を“ない”から“ほとんどいつも”までの4段階で評定し、抑うつ程度の高い方から4-1点を得点化する。10の逆転項目を含んでいる。日本語訳は福田・小林 (1973) を参考にしたが、“いつもとかわりなく仕事ができる”という項目は“いつもとかわりなく勉強がで

Table 1
各変数の平均・標準偏差・相関係数

	第 1 回抑うつ	第 2 回抑うつ	社会的スキル	ストレッサー
第 1 回抑うつ	1.00			
第 2 回抑うつ	.55***	1.00		
社会的スキル	-.19***	-.24***	1.00	
ストレッサー	.32***	.44***	-.07*	1.00
<i>M</i>	43.00	42.78	62.16	40.68
<i>SD</i>	7.12	7.96	6.94	32.70

*** $p < .001$, * $p < .05$.

きる”に、“自分が死んだ方が他の人は楽に暮らせると思う”という項目は“自分がいなくなった方が他の人は楽に暮らせると思う”に変更した。

社会的スキル尺度 鈴木・庄司 (1990) により作成された子ども用の社会的スキル尺度を用いた。鈴木・庄司 (1990) は、小学生を対象に“友達からどんなときにどんなことをされると嬉しいと感じるか”あるいは“友だちからどんなときにどんなことをされるとイヤだと感じるか”について自由記述の反応を収集し、これを行動レベルで受け手が喜ぶ正の社会的スキルと受け手が嫌がる負の社会的スキルに分類し、22 の行動を表す記述からなる社会的スキル尺度を作成した。さらに庄司 (1991) は、大学生を対象にその信頼性と妥当性を検討し、その発達の検討から、社会的スキルは年齢とともに変化は認められるものの、行動レパートリーは発達の大きく変わらないことを見いだしており、本尺度が中学生にも適用可能であると考えた。八つの逆転項目を含み、“全然していない”から“いつもしている”の 4 段階で評定し、社会的スキルの高い (社会的に望ましい) 方から 4—1 点を得点化する。

ストレッサー尺度 わが国において中学生用に開発された尺度には岡安・嶋田・丹羽・森・矢富 (1992) の学校ストレッサー尺度などがあるが、いずれも学校ストレッサーに限定されたものであり、男女両方を対象としたものであることから、本研究では生活全般を対象とした女子中学生用のストレッサー尺度を作成することとした。そこで、第 1 回調査において“あなたは普段の生活の中でどういうことでいやだと感じたり、ショックだと感じたり、いらいらしたり、胸がドキドキしたりしますか”という教示のもとに、嫌悪的な出来事についての自由記述を求めた。その内容を KJ 法により分類し、31 項目からなる女子中学生用ストレッサー尺度を作成し、第 1 回調査時から第 2 回調査時の間のストレッサーについて尋ねた。項目の評定方法は、岡安他 (1992) の学校ストレッサー尺度にならない、出来事の実験頻度を“全然なかった”から“よくあった”までの 4 段階で、その嫌悪性の強さを“全然いやでなかった”から“非常にいやだった”までの

4 段階で評定し、それぞれ 0—3 点で得点化した。さらに、経験頻度と嫌悪度の評価を掛け合わせた値を、その出来事の実験性の指標とすることとした。

結 果

尺度の信頼性

社会的スキル尺度とストレッサー尺度それぞれについて主成分分析を行い、第 1 主成分の固有ベクトルの成分が .30 以上の項目を選定して、その後の分析の対象とした。その結果、社会的スキル尺度では 20 項目、ストレッサー尺度では 26 項目が分析の対象となった。各尺度の信頼性係数 (Cronbach の α 係数) の算出を行ったところ、社会的スキル尺度では .78、ストレッサー尺度では .90 であった。

各変数の記述統計量と相関係数

各変数の記述統計量と相関係数は Table 1 のとおりである。第 1 回抑うつ得点と社会的スキル得点との間の相関は有意ではあったが、その値は小さいものであり、社会的スキルが劣っているほど抑うつが高いという傾向は明らかにはならなかった。また、第 2 回抑うつ得点とストレッサー得点との間には有意な相関が見られ、ストレッサーの実験性の大きいほど抑うつ傾向が高いという関係が見られた。

階層的重回帰分析

社会的スキル得点とストレッサー得点の第 2 回抑うつ得点への影響を検討するために、第 2 回抑うつ得点を従属変数、第 1 回抑うつ得点、社会的スキル得点、ストレッサー得点、社会的スキル得点とストレッサー得点の交互作用項をそれぞれを独立変数とする階層的重回帰分析を行った。

まず、第 1 回抑うつの影響を統制するため、ステップ 1 として第 1 回抑うつ得点を投入した。次に、ステップ 2 として社会的スキル得点とストレッサー得点をそれぞれ投入した。さらに、社会的スキル得点とストレッサー得点の積を求め、これを交互作用項と考え

Table 2
第2回抑うつを従属変数とした階層的重回帰分析結果

	β		
	ステップ1	ステップ2	ステップ3
第1回抑うつ	.550***	.427***	.430***
社会的スキル		-.155***	-.157***
ストレッサー		.294***	.295***
社会的スキル×ストレッサー			-.069*
R^2	.302	.403	.407
ΔR^2		.100***	.005*

*** $p < .001$, * $p < .05$.

テップ3として投入した。この際、多重共線性の問題を低減するため、社会的スキルとストレッサーは、平均値からの偏差に変換して分析を行った（福岡・橋本, 1995）。また、この場合の決定係数（ R^2 ）の増分が有意であるかどうかを検討した。 R^2 の増分が有意であれば、第2回抑うつ得点に対するストレッサーの影響が社会的スキルの水準によって異なることになる（新井, 2001; 福岡・橋本, 1995）。

結果をTable 2に示した。社会的スキル得点については、第2回抑うつ得点に対する有意な負の標準偏回帰係数（ β ）が得られ、第1回調査時の抑うつ得点を統制した後でも、第1回調査時点での社会的スキル得点が低いほど第2回抑うつ得点が高いことが示された。

社会的スキル得点とストレッサー得点の交互作用項は第2回抑うつ得点に対し有意な β を示し、 R^2 の増分（ ΔR^2 ）も有意であった。そこで、社会的スキル得点が-1標準偏差（-1SD）および+1標準偏差（+1SD）の場合の単回帰直線を求めた。この単回帰直線を図示することで、社会的スキルとストレッサーが抑うつに及ぼす影響を視覚的にとらえることができる（新井, 2001; 高比良, 2000）。Figure 1に示された単回帰直線の傾きから、社会的スキル得点が低い場

合は、ストレッサーの衝撃性が高い時に第2回抑うつ得点が大きく上昇したが、社会的スキル得点が高い場合は、ストレッサーの衝撃性により抑うつ得点に大きな差は見られないことが分かった。

考 察

本研究の目的は、女子中学生を対象として、(a)社会的スキルの欠如が抑うつに関連するか、(b)その後の抑うつを予測するかを明らかにすることであった。社会的スキルと抑うつの相関関係については有意な負の相関が示されたが、その値は小さく、仮説(a)を支持するほどのものではなかった。また、階層的重回帰分析の結果により、社会的スキルが劣っていた生徒は、その後に抑うつ傾向を高めやすいことが示され、仮説(b)は支持された。相関が小さかった点に関する検討課題として、社会的スキルの測定方法があげられよう。庄司（1991）自身が指摘しているように、本研究で用いた社会的スキル尺度は相互作用の受け手の側になった調査に基づいたものであるため、今後は、質問や挨拶などのより初歩的なスキル等について網羅された項目を加えた尺度での検討が必要であろう。また、本研究では、社会的スキルの測定を自己報告質問紙で行った。庄司（1994）は、社会的スキル尺度とソシオメトリーとの関連を検討した研究において、相互作用の受け手側から否定的としてあげられる行動であっても、ソシオメトリーと正の相関をもつ行動があることを明らかにした。これは、受け手側から不快と評価される行動でも、その行動を用いる場面や相手との関係によって、受け手側にとっての評価が異なることを意味している。自己評価のほかには他者評価や観察などの様々な測定法を組み合わせた包括的な社会的スキルの測定をすることで、異なる結果が得られるかもしれない。

本研究の次の目的は、(c)ストレッサーが媒介した時の抑うつと社会的スキルの関係を明らかにすることであった。階層的重回帰分析と単回帰直線の結果を検討した結果、社会的スキルの劣る生徒と優れている生

Figure 1. 社会的スキル水準別の単回帰直線。

徒では、ストレッサーの衝撃性によって抑うつ傾向の上昇に差があることが見いだされ、仮説(c)は支持された。つまり、社会的スキルの不足している生徒は抑うつになりやすいというだけでなく、ストレッサーの衝撃性が高い時により抑うつ傾向を増大させやすい傾向をもつことが示された。本研究では第1回調査と第2回調査の間隔を、6週間と比較的短かく設定した。これは、社会的スキルを特性ととらえ、抑うつを状態としてとらえた場合、先行研究(Joiner, Alfano, & Metalsky, 1992)を参考にすると、6週間程度で抑うつの変化が生じると考えたからである。しかし、社会的スキルの欠如がその後の抑うつに及ぼす影響についてさらなる確証を得るためには、より長いスパンで経年的に幾度かの調査を繰り返すといった研究が今後の課題となろう。

さらなる検討課題として、第3の変数の存在が考えられる。Segrin (1990)は、社会的スキルと抑うつとの関係に関する研究を、その社会的スキルの測定方法により、自己評定、他者評定、行動観察に分類し、メタ分析を行った。その結果、すべての測定方法において抑うつの人とは非抑うつの人よりも社会的スキルについて劣っていたが、自己報告によるものが抑うつと最も強い関連を示し、他者評価、行動観察の順に低くなることを報告した。さまざまな抑うつ認知理論が指摘するように、抑うつ的な人がネガティブな認知をもつならば、自己の社会的スキルに関しての認知が歪んでいるかもしれないことを、この結果は示唆していると言える。今後は認知スタイルに関する変数を加えた研究を行うことで、より適切なモデルの構築が可能となるだろう。

青年期は最も社会的スキル訓練研究が立ち後れている時期であると言われる(佐藤・佐藤・岡安・高山, 2000)が、この時期の抑うつに対して、社会的スキル訓練も含めた具体的な予防や介入を可能にするようなさらなる実証研究の積み重ねが求められよう。

引用文献

- American Psychiatric Association (1980). *Diagnostic and statistical manual of mental disorders*. 3rd ed. Washington, DC: American Psychiatric Association.
- 新井幸子 (2001). 理想自己と現実自己の差異と不合理な信念が自己受容に及ぼす影響 心理学研究, **72**, 315-321.
- (Arai, S. (2001). The effects of ideal-real self discrepancy and irrational belief on self acceptance. *Japanese Journal of Psychology*, **72**, 315-321.)
- Blechman, E. A., McEnroe, M. J., & Carella, E. T. (1986). Childhood competence and depression. *Journal of Abnormal Psychology*, **95**, 223-227.

- Coyne, J. C. (1976). Depression and the response of others. *Journal of Abnormal Psychology*, **85**, 186-193.
- Dykman, B. M., Horowitz, L. M., Abramson, L. Y., & Usher, M. (1991). Schematic and situational determinants of depressed and nondepressed students' interpretation of feedback. *Journal of Abnormal Psychology*, **100**, 45-55.
- Fleming, J. E., & Offord, D. R. (1990). Epidemiology of childhood depressive disorders. *Journal of American Academy of Child and Adolescent Psychiatry*, **29**, 571-580.
- 福田一彦・小林重雄 (1973). 自己評価式抑うつ性尺度の研究 精神神経学雑誌, **75**, 673-679.
- (Fukuda, K., & Kobayashi, S. (1973). A study on a self-rating depression scale. *Psychiatria et Neurologia Japonica*, **75**, 673-679.)
- 福岡欣治・橋本 幸 (1995). 知覚されたソーシャル・サポートのストレス緩和効果におけるサポート源とサポート内容の影響——看護教員養成講習会の受講者を対象として—— 健康心理学研究, **8**(2), 1-11.
- (Fukuoka, Y., & Hashimoto, T. (1995). The influence of sources and contents of perceived social support on their stress-buffering effects: A research of the hospital nurses attending the nursing training course. *Japanese Journal of Health Psychology*, **8**(2), 1-11.)
- Hammen, C. L., & Peters, S. D. (1978). Interpersonal consequences of depression. *Journal of Abnormal Psychology*, **87**, 322-332.
- Harrington, R., Fudge, H., Rutter, M., Pickles, A., & Hill, J. (1990). Adult outcomes of childhood and adolescent depression. *Archives of General Psychiatry*, **47**, 1112-1117.
- Joiner, T. E., Alfano, M. S., Jr., & Metalsky, G. I. (1992). When depression breeds contempt: Reassurance seeking, self-esteem, and rejection of depressed college students by their roommates. *Journal of Abnormal Psychology*, **101**, 165-173.
- Lewinsohn, P. M., Rohde, P., Seeley, J. R., & Hops, H. (1991). Comorbidity of unipolar depression: I. Major depression with dysthymia. *Journal of Abnormal Psychology*, **100**, 205-213.
- 村田豊久・皿田洋子・堤 龍喜・新保友貴・中庭洋一・小林隆児 (1990). 児童・思春期の抑うつ状態に関する臨床的研究 II 厚生省“精神・神経疾患研究委託費”2 指—15 児童・思春期における行動・情緒障害の成因と病態に関する研究 平成元年度研究報告書 pp. 57-66.
- Nolen-Hoeksema, S., & Girgus, J. S. (1994). The emergence of gender differences in depression during adolescence. *Psychological Bulletin*, **115**, 424-443.
- 岡安孝弘・嶋田洋徳・丹羽洋子・森 俊夫・矢富直美 (1992). 中学生の学校ストレッサーの評価とストレス反応との関係 心理学研究, **63**, 310-318.
- (Okayasu, T., Shimada, H., Niwa, Y., Mori, T., & Yatomi, N. (1992). The relationship between eval-

- uation of school stressors and stress responses in junior high school students. *Japanese Journal of Psychology*, **63**, 310-318.)
- Peterson, L., Mullins, L. L., & Ridley-Johnson, R. (1985). Childhood depression: Peer reactions to depression and life stress. *Journal of Abnormal Child Psychology*, **13**, 597-609.
- 佐藤正二・佐藤容子・岡安孝弘・高山 巖 (2000). 子どもの社会的スキル訓練——現状と課題——宮崎大学教育文化学部紀要 教育科学, **3**, 81-105.
(Sato, S., Sato, Y., Okayasu, T., & Takayama, I. (2000). Social skills training with children: A review. *Memoirs of the Faculty of Education and Culture, Miyazaki University, Education Science*, **3**, 81-105.)
- Segrin, C. (1990). A meta-analytic review of social skill deficits in depression. *Communication Monographs*, **57**, 292-308.
- Segrin, C., & Abramson, L. Y. (1993). Social skill deficits and psychosocial problems: Antecedent, concomitant, or consequent? *Journal of Social and Clinical Psychology*, **12**, 336-353.
- 庄司一子 (1991). 社会的スキルの尺度の検討——信頼性・妥当性について——教育相談研究, **29**, 18-25.
(Shoji, K. (1991). Development of social skills-rating scale: It's reliability and validity. *Bulletin of Counseling and School Psychology*, **29**, 18-25.)
- 庄司一子 (1994). 児童の self-control と社会的スキルとの関係 教育相談研究, **32**, 63-67.
(Shoji, K. (1994). The relationship between self-control and social skills in children. *Bulletin of Counseling and School Psychology*, **32**, 63-67.)
- Sugawara, M., Mukai, T., Kitayama, T., Toda, M. A., Shima, S., Tomoda, A., Koizumi, T., Watanabe, K., & Ando, A. (1999). Psychiatric disorders among Japanese children. *Journal of American Academy of Child and Adolescent Psychiatry*, **38**, 444-452.
- 鈴木 聡・庄司一子 (1990). 子どもの社会的スキルの内容について 教育相談研究, **28**, 24-32.
(Suzuki, S., & Shoji, K. (1990). The contents of children's social skill. *Bulletin of Counseling and School Psychology*, **28**, 24-32.)
- 高比良美詠子 (2000). 抑うつのホープレスネス理論における領域一致仮説の検討 心理学研究, **71**, 197-204.
(Takahira, M. (2000). An examination of congruency hypotheses in hopelessness theory of depression. *Japanese Journal of Psychology*, **71**, 197-204.)
- Wierzbicki, M., & McCabe, M. (1988). Social skills and subsequent depressive symptomatology in children. *Journal of Clinical Child Psychology*, **17**, 203-208.
- Zemore, R., & Lewis, W. D. (1983). Interpersonal problem solving skills and depression proneness. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **9**, 231-235.
- Zung, W. W. K. (1965). A self-rating depression scale. *Archives of General Psychiatry*, **12**, 63-70.

——2004. 3. 17 受稿, 2005. 5. 14 受理——